

戦時下『むらさき』にみる金子光晴

暮尾 淳

七月二日、金子光晴の骨をひろった。いよいよの別れに臨んで、「金子先生……」と柩に手をつけて涙した新谷行は、わたしらしめて、自分の顔をみられるのがつらさに柩に背を向けさせた。三月二十六日、弟の骨をひろった。死というイベントは、なんだか夢のなかでのでき事のような。ここに初期の「コスモス」同人でもあった金子光晴の追悼に代えて、わたしの手許にある戦時下『むらさき』（ほぼ昭和十五年十月号から十七年四月号まで）に発表した金子の詩について、若干の紹介をおこなってみよう。

日本の教養と表紙に銘打った紫式部学会編輯の月刊誌『むらさき』（発行所むらさき出版部、発売元巖松堂書店）は、毎号の表紙に平安朝ふうの彩色日本画をもちい、巻頭に詩、短歌、俳句を載せ、大日本歴史講話、華道、

美術などの趣味と教養、小説類、古典名作鑑賞、新刊書評、読者文芸などという柱を軸に編集がなされていた。この雑誌の性格は、毎号に載っている「紫式部学会だより」に、「……本会は紫式部の業績を追慕し、会員相互に日本文学を通じて国民としての教養を深め、併せて社会の之に関する知識と理解の増進普及を計るを以て目的といたします。／本会は日本文学に関する調査研究、源氏物語講座：講演会：、日本文学に関する有益図書推薦：、図書の出版、販売、女子の日本文学に関する研究の奨励其の他前条の目的を達成するに必要な事項を行います。……」とあるように、「女子」に日本文学をひろめるための活動の一環としての、セミアカデミックな啓蒙誌というところにあつた。聞くところによると、地方に勤労働員されていった先で、よく『むらさき

き』は女学生のために一括購入されていたという。少しく内容をみるなら、昭和十六年十月号の「古典を読むについて」という一文で風景景次郎は、「本当に大国民となった標は、自分の国の祖先の残してくれたものの中に血のつながりを感じ、それをなつかしみ、誇とし、それによつて心の隅々、いささかの気持の揺ぎにまでも、何ともいへぬ奥深い香はしさ、豊かさ、深々とした陰影を持つやうになる事である。」と書いているが、国粹主義の時流のなかで、国民道徳を国文学にかかわらせて女性に説く雑誌でもあったのだろう。

その『むらさき』に、金子光晴は四篇の詩を発表している。もつともこの雑誌で、佐藤惣之助は詩の選をしているし、森三千代は小説を書いていたしというようなことで、『むらさき』と金子は近い関係にあつた、とおもわれる。四篇とは、昭和十五年十一月号の「蝙蝠」、十六年七月号の「唄」、十六年十一月号の「フォンテンプロオの宿」、十七年四月号の「椰子の祈」である。このうち「唄」と「椰子の祈」は、昭森社の金子光晴全集にもみあたらないので、ここに紙面を借りて紹介させてもらうことにする。

唄

言葉には羽根があり、

魂は黄金。

ゆく路は黎明^{しめみ}。

額には若さと未知。

かかるものを自分と称^よんでゐたが、

その自分を逐つて、自分は、

行^{わだつみ}澄に映る雲のやうに

たゞ 過ぎた。むなしく、

春と秋の風景のなかを。

椰子の祈

—— 舊バタビア・じゃがたら街道にて

頭盧の禿げた

蹴爪のある椰子。

煮え油をかぶり、
眼は煙硝でつぶれ、
傘の轆轤^{うろこ}のやうな
ばらばらな椰子が
老いさらばえた身が、
猶、天に縋る。

「この地を

ベストの災厄から救ひ給へ。
大天使イブラヒム。
ピーター・クーンの砲壘に
冥罰をくだしたまへ。
サルタンに加担したまへ。
なによりも屈辱の
強制労働の鎖を寸断にしたまへ。
痴呆になりたる民族を救ひたまへ。
荒廢したその頭に今一度、
誇と夢を與へたまへ。
この願をきゝたまへ。
さなくばこの世を焼瓦として、
むしろこなぐに碎き棄てたまへ。」

滅、荒涼たる無人の土に化した。

二篇とも金子のなかでは小品であり、「唄」には青春への挽歌、放浪生活のからやかなニヒルがみられ、読者が女学生であることをおもつと、金子が意図したかどうかは知らず、ふと微笑をさそわれるものがある。「椰子の祈」のピーター・クーンとは、十七世紀前半オランダ東インド会社の植民地経営の基礎をため、オランダ東インド総督となつてイギリスを敗退させ、ジャカルタをジャワにおける最初の占領地とした、ヤン・ルビーテクルス・ゾーン・クーンのことであらう。

この「椰子の祈」の載つたのは、昭和十七年四月号であり、すでにパールハーバーの幕は切つて落とされ、国内はいづつ日本軍の捷報に湧きたつており、文芸誌は、さかんに戦争詩を掲載していたところである。『文芸』昭和十七年二月号は「国民詩特輯」を組んで、三好達治、大江満雄、阪本越郎、田中克己、永瀬清子、村野四郎、笹沢清明が詩を寄せ、『文芸界』同年一月号は「愛国詩特輯」をおこない、尾崎喜八、草野心平、竹中郁、三好達治が詩を載せているのだった。また金子がこの詩を書いたおなじ号の「むらさき」におい

でも、蔵原伸二郎は、「ああ美しき鳥らととも／南の島々より／勝いくさの春は来にけり／風はきにけり」と結ぶ「戦勝の春」を書いているし、阪本越郎は、「私はおほらかに民族の心を感じて歩いて行つた／私は一歩一歩に祖国の土を感じることが出来る」という詩句をもつ「春の太陽」を書いている。巻頭の論文は、同年三月六日午後八時から放送されたという、平出英夫海軍大佐による「大君の辺に死なむ―偉勲輝く特別攻撃隊」であり、「十二月八日未明、大東亜戦争劈頭に於て、尊くも、散つた特別攻撃隊、その日の面影について、海軍報道部長平出大佐は三月六日左の如く言々々々、聴くものすべて、感涙誘ふ発表を行ひ、純忠に燃える勇士達の大精神を讃へて次の如く放送されました。」というカコミが冒頭についている。金子光晴の作品の創作時を推定するのは、じつさいたいへんにむづかしいことなのだが、「椰子の祈」は、少なくとも後代のわたしとしては、そのような当時の情勢を意識して発表されたと考えようである。『朝日新聞』夕刊同年三月三日号の見出しは、「ジャバ島に一斉上陸」であり、「敵連合軍の本拠を衝く」である。またおなじ「むらさき」の「編輯後記」には、

「新しく生れた昭南島」シンガポール占領後の日本による呼称（幕尾）を拠点として新しい大東亜の政治が行はれようとしてゐる。既に出版ははじまっている。その間にラングーンは陥ち、蘭印は脆くも降伏し、皇軍の手は遠く濠洲、印度に伸びようとしてゐる。私達は絶対不敗の皇軍に無限の信頼と感謝を共にもつて同時に、靖国の神々に心からのお礼と瞑福をお祈りする次第です。」とある。文章にはそう嘘は書けないとすれば、これが当時のジャーナリズム一般のすう勢であつた。この時において、戦場は本国より遠く、言論は統制されており、まだ日本は勝ちいくさであつた。原満三寿による金子の年譜によると、昭和十七年の頃には、「一月、三千代に外務省より対仏印日本文化使節の招誘がきた。光晴のすすめと三千代の好奇心から、仏印に飛びドクレー総督以下現地主脳に会見。…」とある。この「光晴のすすめ」とは、自伝「詩人」などによると、日本人すべてが戦争に血道をあげているのではなく、心ある日本人もいることを伝えてくるように、金子が森三千代にすすめたことを指している。そのようにみえくると、小品ながら、一見わかりやすそうで複雑な、この詩「椰子の祈」の真意が、おぼろ

げながら形を表わしてくるように、わたしはおもう。

作品「椰子の祈」にある大意は、疲弊した民族への独立への祈りと解釈してよからうが、シンガポール、パタビヤなどマレー・蘭印の地をも放浪してきたコスモポリタン金子光晴とはいえ、日本人金子がそれを祈っている点に、この詩について単純にはいかな理由がある。

蛇の話

高島 洋

下水処理場には
草むらの多いせいか
蛇（青大将）がよく出没する
先日水道栓の横で、とぐろをまいていて
わたしにとらみ合いとなつた
たまたま四輪車が入ってきて
わたしの視線が一しゅんそれたすきに
蛇は姿を消していた

今日もモーターカバーをあげると

この願ひは、皇軍によつて、「眼は煙硝でつぶれ」た椰子に身を化して、金子が口にしてゐるのである。その文章のどこかに金子は、自分は現地人を好きになれなかつたが、西欧の植民地でつぶさに体験した搾取と残虐に対しては、今度の戦争が幾らかでも意味をもつなら、その点ではなどと考えたこともあつた

と告白していたが、そんな相対的な視点を背景に置いてみるならなおさら、技巧としても「落下傘」終連にある「神さま」への祈りとくらべてもみるばあい、「椰子の祈」はこ

とばが直接的で、ひびきも強い。「強制労働の鎖を寸断したまへ。」というなまな一行などは、一瞬プロレタリア詩をも連想させる。この詩のトーンには、ある憤りのようなものが感じられるのである。わたしはここで、「詩人」より次の引用をおこないたい。

「その頃、不拡大方針をうたつていた戦争は、底なし沼に足をつつこんで、十二月八日、ラジオは、真珠湾奇襲を報道した。僕の一家が、そのとき、吉祥寺一八三一番地の家へ移つてきてまもなくであつた。母親も、子供も、ラジオの前で、名状できない深刻な表情をして黙っていた。

『馬鹿野郎だ！』

「その頃、不拡大方針をうたつていた戦争は、底なし沼に足をつつこんで、十二月八日、ラジオは、真珠湾奇襲を報道した。僕の一家が、そのとき、吉祥寺一八三一番地の家へ移つてきてまもなくであつた。母親も、子供も、ラジオの前で、名状できない深刻な表情をして黙っていた。

蛇が眠っている
おどろいた蛇はするするにげて、そばの沈
殿池にとびこんでしまつた
ところが見事な水泳である
頭をもたげてすいすい泳ぎ
向う側の一メートル程の高さのコンクリー
トに
細長い体を垂直に立つて上りきり
逃げ失せたのである
その柔軟と硬直の体質は 忍者と言おうか
まさにゲリラの体質ではないか
だから冬の夜など
マンホールからするするもぐりこみ
地下ケーブルをつたつて
事務所内の配電室に侵入し
動力盤のなかの、二〇〇ボルトの電流を見
事にショートさせ
停電
処理場内の全機械を停止、マジさせるのだ
勿論、蛇も棒状に感電して討死である

この戦争には、軍人側の宣伝以上に、国民一般の鬱屈した野望が、むしろ食み出して感じられたものであった。という醒めた実感に裏打ちされているがゆえの、ひろく人間の生存と権勢、欲望にまつわる怒り、絶望の感情がこめられていた、とそんなふうになつてはもうのである。晩年のエロちいさんぶりもみかたによつては面白いのだからけれど、ここにはわたしの好きな詩人、金子光晴がいる。放浪の体験と『鮫』の自我が培つた、日本人になりきれない日本人金子の、異邦人の眼が、時流を眺めまわしている。注の「荒涼たる無人の土」云々にも、時代の行末を暗示しようとしているとき、一人の詩人の心の気配を、わたしは感じる。日本軍が進攻していったマレー蘭印について、その体験による認識の根から、このようなかたちで感情を詩にこめた詩人を、わたしは当時に知らない。作品を抜けていつて我に、詩そのものに帰ってくる弱者、犠牲者について放れないニヒルと絶望の憤り、そこには反戦、厭戦の詩人としてのこの先詩をすすめていく金子の体質を、肌ざわりの一端を知ることができるのである。

この「椰子の折」が、のちの金子の昭森社の全集に収録されなかつたのは、あるいはなにか理由があることなのだろうか。金子が山中湖畔で書きつづった作品群のなかに置いてはもちろん、「こなん」に碎き棄てたまへ」というようなひびきには、まとわりつくような、こなれのわるいといつてもいい口調がある。これは「フォンテンプロオの宿」のなめらかな詩情の運びとはあきらかに違い、単にモチーフによるちがひ以上のもの、つまり対英米戦争の開始のさいの「腹立たしき」を介在させなければならぬものがある。さきさんの『短歌』に連載した金子の「鳥は巢に」には、次のような個所がある。

「水曜日、午後三時、猿さんは、約束より三分ぐらい早く、新宿三丁目の竹田屋旅館に姿を現わした。本来ならば、酒を暖めて待つのが常法であろうが、強度な気管支喘息にアルコール類は禁物の僕は、人生に於ける『酔う』という状態に、不信と、嫌悪をいだきつづいて何十年をすごしてきた。僕にとつて、もつとも禁むべきものは、人間の感情の昂揚と、そのでたらめな方向への正当化であつた。そこに僕の現代芸術に対する椰掄の精神と、詩への根元的嫌悪がある。（僕を知るうえに見のがすことのできない重要な緒かもしれない）」

ると、発表誌の性格によるちがひはあるのだが、詩のテクニク、ことばともに前者はストリートであり、詩の流れ、トーンには、憤りゆえのごつごつした手ざわりがある。力づくともいえるようなリズムすらある。『むらさき』の読者は、時勢下においてもなおさらに抒情詩の好きな婦女子なのである。わたしは金子光晴は、この「椰子の折」については、自分の「感情の昂揚」を知り、作品として不出来とみなし、嫌い、あるいはのちにいづれなんらかのかたちで詩集や長篇詩に組みこむうとして、ついにその適所をみいだせぬままに放置し、忘れさつたのではないかと想像するのである。もつとも生きている金子光晴に尋ねたなら、自作の掲載誌なんて一読右から左へボイの人だつたのだから、「へえ、そんな詩がありましたかね。いやあ、忘れてましたねえ。」で終つてしまう話ではあるだろう。それだからこそ生きているうちに聞いておけばよかった、と、これは悔ではなく、いましみじみとわたしは金子光晴をなつかしくおもふのである。

十一月号の「フォンテンプロオの宿」であるが、前者は、昭森社の全集の「南方詩集」補遺に、後者は題を変えて、『女たちへのエレジー』の「心のうた」にはいつている。

「蝙蝠」は、バタビヤ旧港の夕暮の情景をうたつたもので、「かはほり」のとんでいる感じが、やわらかな抒情的なイメージで活写されており、「私の頬をかすめて／やはらかい爪、／うすい翼。」などという触感が、いかにも金子のそんな詩らしく、しかもどこかにバガボンドふうな明るいニヒルを漂わせている。「かへらないことが／最善だよ」それは放浪の哲学。」というのには「南方詩集」を象徴することばでもあるが、たしかにそれにふさわしい一篇である。

もう一篇は、次のような作品であつた。

フォンテンプロオの宿

窓のダンテルのむかうで、
フォンテンプロオの森が
蝙蝠傘をさしてゐる

女の靴下の穴からは
赤い小指が飛出し、

割れたコンパクトの鏡に
鼻の穴のくろさがうつつてゐる。

僕の頭にも蜘蛛の網が張りさうだ。
だが外へゆくのも嫌だ。
寒い。三日間びしょびしょ降り続く。
貧乏が裸足で歩いてゐる。

アムールこそよなき珍味とは
なんたる空腹のまけをしみ。
昨日の献立表。

かつてあかるい散歩の日
徑でひろつたなま栗一つ。
卓にのせて見てくらす。

そこで又僕はひもじい詩を作る。
「黒髪に 櫛のしづむやうに
フォンテンプロオが夜にしづむ。」

これはのちの詩集『女たちへのエレジー』においては、題を、「フォンテンプロオのオテル・ド・エーグル・ノールにて」と変えて、次のように書き改められている。

窓掛のダンテルにけぶり
フォンテンプロオの森がさむさむ
これは洋傘をさして、立つ。

窓の外は、けふで三日もふり通し。
貧乏と裸足と、すきっぱらがるよ。
だが我々はまだあすまで、この二百法で
王朝まがひのムーブルはわれらがもの。

女はさすがに気弱いもの。傍らの
鏡から鏡にうつる幾十の
おくれた髪をかきあげ、身をかしげて
ゆく末のかちごと。

末路のアントニオがクレオパトラにいふせ
りふ。

悲壮なやうすで泰然と僕はいふ。

——みやれ、黒髪に櫛がしづむやう
フォンテンプロオにいまし夜が迫らうぞ。

『ねむれ巴里』には、フォンテンプロオでの
「黒鷲旅館」つまり「オテル・ド・エーグル・
ノアール」について書いてあり、それは森三
千代とパリで再会して間もない頃の日々のご
とであった。ダンテルとはレースのことであ

ろうが、ここに二つの作品をくらべてみると、
事実はどうであれ、描写による詩としての実
感には前者にあり、うらぶれた感じと居すわっ
たような強さが出ており、後者は説明的であ
るのだが、歌劇ふうとでもいおう言ってお
こうか、そんな面白さはある。もちろんこれ
は好きずきで、このような作品のばあい、ど
ちらでもない性質のものなのであるが、詩
を書くことが結局なによりも好きだった金子
光晴をしのぶ意味もあって、わたしはこうし
て二篇を写してみたのである。しかし、女の
イメージにかんしては、二つの作品ではそう
とうにちがいが、「鼻の穴のくろさがうつて
ゐる。」は、いかにも金子らしい女性への視線
であり、また日支事変から十二月八日直前の
時代相を作品の背景に置くならば、「だが外
へゆくのも嫌だ。／寒い。三日間びしょびし
よ降り続く。」には、詩のトーン、作者の意図
にはかわりなく、見当外れと片づけてしま
うにはしのびない、ある感情移入をおこなっ
たきわめて少数の読者もいたのではなからう
かと、わたしは考えをめぐらせてみたりもす
る。金子はよく作品に手を入れるのだが、こ
れがもしおなじ題での書き改めだったなら、
かなりにちがう印象が、一つの作品について

存在することになったろう。

じつは金子光晴の戦時下の詩作品につい
ては、こまやかな注意をばらうにこしたことは
なく、たとえば昭森社の全集においては、
『鯨』の「どぶ」には、「——なにもひけ目はね
え。皇后さまだつて、女はからだをううてい
きるよりはかかないのだから。」とあるが、昭
和十二年八月刊行当時の詩集『鯨』にあつて
は、「皇后さまだつて、」が、「……………」
……」となつており、わたしはまったくうっ
かりしてそれに気付かず、さいきんある間
違ひをおかしたのだが、それらにかかわる問
題は、かなりふくざつでもあるので、いずれ
稿をあらためて考えたいとおもう。そのこと
は、金子のような詩人にあつては、決してつ
まらぬせんきくなどではなく、そんな作業の
繰り返しの中に、金子光晴の戦時下抵抗
のより手応えある実体や、詩精神が、名人芸
としてではなく、わたしらへの受けつけられる
べき文学の本流として、さらに親しくその全
貌をあきらかにしてくる一面をもつはずであ
ると、そのようにわたしは考えるのである。

コスモスと壺井

秋山 清

壺井が死んでから、コスモスに壺井繁治の
小さい記事を書くようにといわれて、なる程
と思つた。彼は一時期コスモスの同人だった
ことがあつたからである。同人になつたのは
第一次コスモスの八号くらいから、それまで
原稿をかいりたりしていた連中の中から五、六
人の同人を定めたとき、彼もその中にいた。
はじめからの金子、岡本、小野、秋山の他に
長谷川七郎、伊藤和、植村諦、広沢一雄、田
木繁、木原実、壺井繁治という同人名が第九
号（昭和23・1）に発表されている。

壺井は創刊号の座談会に出ていた。岡本、
壺井、秋山、植村、毛利昇のメンバーで「詩
の研究について」というのだったが、その
とき宮崎譲が傍聴者としており、茅場町の私
の事務所、昭和二年の二月だったと思う。
そのとき新日本文学会の詩運動について語
られ、壺井と岡本が率先して「詩人戦犯」を

われわれと区別してゆく、という方針を打
出して、今昔の感がある。彼らの日共一
新日文の文学戦犯の問題に乗つてゆこう
という意見に私が、戦犯追及もいけど、自
分のことはどう問題にするんだといったこと
から、壺井、岡本と一寸対立したが、後に記
録をとっていた毛利昇がやつて来て、その部
分を何とかして欲しいとねばつて行つたこと
があつた。

同人に加わる前から壺井は作品もエッセイ
も度々寄稿してくれていた。古い詩人仲間
で私には一寸先輩で、昭和二年の末に転向して
マルキシズムに行つたが、奥さんの栄さんも
含めて戦時中にも、時に遊びに行つたりもし
た。

コスモスには戦時中にかいたという短い詩
をいくたびか発表している。その頃彼は他の
場所では、小林多喜二の詩をかいりたり、朗読
したりしていたが、戦時中のあまり戦闘的では
なかつた詩発表には、コスモスが都合が良
かつたのかもしれない。

私は壺井の詩をあまり注目して来なかつた。
古い作品の「頭の中の兵士」というのがいつ
も記憶にあつて、変にプロレタリア詩臭いも
のは、興味をひかなかつた。むしろ戦時中書
いたというコスモスに発表されたものなどの
方が親しめたようである。

『詩人会議』に求められて彼の追悼文をかい
たが、「壺井論」「壺井研究」をやる必要が
ある、といつておいた。彼に対するまともな
論評が殆んどないということも含めて、壺井
繁治論の必要があると私は切実にそう思つて
いる。何故に壺井の詩があまり面白くないか
を考えることの必要と、そのことへの興味を
私はもっている。いや若い人たちにそれを期
待している。

彼はよく詩集を次々と出したが、その中の
作品の半分くらいが、前の詩集からとつてあ
るので、一度文句をいったことがあつた。一
冊になる程作品が出来てないなら詩集なんか
を出すなよ、と。そういわれて一寸不快そう
な顔をしたこともあつた。壺井については思
い出すことが沢山あるのに、書くことは多く
ない。斎藤峻の告別式の時、詩人の友人の
代表として彼一人が弔辞を述べたのには、ち
よつとびびりしたが、壺井にはそんなところ
もあつた。日共、詩人会議、壺井繁治とい
う一線は、近くて、近くなかつた彼とのつな
がりを私に納得させるようである。

（一九七五・一〇・四）

ある風景

長谷川七郎

露台から 見下す 祭のイルミネーションが
青白いホタル火のような はかない点になって目
ばたき

果ては 古代からの廢墟の闇に吸われる

その晩 酔い痴れたジャンヌがはじめて泣いた
意味のない言葉のすべてを省いて

オレはただ狂気のジャンヌを抱いた
耳に流れる清冽なせせらぎは

町をとりまく溪流のまぼろしであるか
はげしく跳くからだも いつかりズムが重なり一
つにとけあつた

迷いこんだ山道で 息ぎれはしたが

乾いた高地で汗はでなかった

そよ風が吹くと 華車なガラス細工のように ポ
プラの葉裏が銀色に翻り 音をたてずにきらめ
いた

石垣の切れ目をさぐり ジャンヌの手を引いて匍
い上ると

忽然として広い山頂が開けた

台座下から百メートルもあろうか

丘を圧したスターリンの巨像は

いつ 剣を構えた女人像に変身したのか
しかしそんなことはもうどうでもいい

下界の町の 色とりどりの凝灰岩や大理石の建物
の陰になって

泥でこねた陋屋や 折れ曲つた細い露路 頭布を
かぶつた老婆の姿はここからは見えない

思い出のすべてをカナケルの丘に埋めましようね
とジャンヌが言った

返事のかわりにオレはうすく嗤つた

異教の残骸を留めた石壇や柱 聖水盤の瓦礫が続
く スヴァルトノットの廢墟

荒野の果ての 氣の遠くなるような歲月の累積
富士によく似た円錐形の山が大小二つ

どういふものか いつ見ても地平のもやの上にぼ
っかり浮んでいる

国境までは指呼の間だ

右手はトルコ 左側はイラン領

ジャンヌは緩やかに迂回した車道を
オレは道のない茨の斜面を真直ぐに下つた

郡上八幡

伊藤正斉

秋晴れの吉田川。

水はもうしみいるように冷たい。

吉田川の流れば鮎のいろをしている。

鮎の匂いがたちこめている。

首と胴とはなれたときのしぶきのいろ。

鮎の匂いは、

獄死した百姓の匂いがする。

鮎を釣っている人がいる。

橋の上からそれを見ている人がいる。

吉田川に添って町並がある。

ひかり流れる先に稲が穂をたれている。

高田英太郎の生家が、

吉田川の岸辺にある。

今は高田のものではないが、

わたしたちはその家にあつまつて、

この先ざきのこと話あっている。

八幡町新町には、

おもだか家民芸館がある。
民芸館のなかは、

すみずみまで、

奥美濃の人々の、

重いくらしが黒く光っている。

鮎の匂いがただよっている。

そこに水野隆は詩を書いている。

隆の父、今はなき柳人は、

鮎を画く達人であった。

わたしたちの車座に水野隆も加わる。

山の上の木がくれに、

八幡城がちらと見える。

その石垣の人柱となった「およし」は、

鮎のような美人だったという。

太鼓と笛の櫓から流れる唄につれて、

郡上おどりは、

だんだん熱をおびてくる。

わたしたちも、それぞれ列に加わる

唄は郡上の夜の山なみにこだまする。
だがなんという静かなにぎわい。

吉田川の、

小駄良川の激流を、

今鮎は、

静かに下りはじめる。

公営プール

西 杉 夫

プールサイドを走ってはいけない。

プールサイドで物を食べてはいけない。

物を飲んではいけない。

飛びこんではいけない。

潜水はいけない。

めがねをかけたままではいけない。

体にオイルをぬってはいけない。

手ぬぐいを頭にまいてはいけない。

水着以外のものをつけてはいけない。

ボール投げはいけない。

浮き袋はいけない。

子供は深いところへいつてはいけない。

ロープにさわってはいけない。

ふざけてはいけない。

二時間たったら帰らなければいけない。

監視本部のマイクは

水しぶきと喚声を上まわる音量だ。

等間隔におかれた四つの監視台からは

四人の目。

つぎつぎにあらわれる違反者めがけて

行動はすばやく組織的だ。

マイクが違反者の位置と特徴をいいたてる、

監視台からいつせいに笛がなる、

いちばん近い監視員が

まっすぐにかけつける。

しゃべってはいけない。

笑ってはいけない。

だまってはいけない。

立ってはいけない。

歩いてはいけない。

動いてはいけない。

マイクは突然

調子を高めて叫びはじめる。

無限に音量を大きくしながら

くりかえしつづける。

監視員は台からかけおり

走りまわる、笛をならす。

水がいつぱいにはりつめたプールに

陽がきらきらとゆれ

底にかかれたコースの一本一本が

白くあざやかに浮き出ている。

四人の監視員は

身動きもしないでプールを見下ろしている。

だれもない。